JAPAN URBAN DESIGN INSTITUTE
都市環境デザイン会議
東京都渋谷区広尾1-10-4
越山LKビル内 〒150
TELEPHONE 03-5420-5995
FACSIMILE 03-5420-5996

JUDI NEWS

018 JUNE 20. 1994

発行者
都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●神のデザイン、人のデザイン …… 1
●都市環境デザインをとりまく状況 …… 2
●都市環境デザインとアジア …… 3
●山手地区5つのオープンスペース …… 4
●「新と旧の融合」久澄橋のデザイン …… 6
●研修研究委員会報告
・第2回都市環境デザインセミナー …… 8
●ブロックニュース
九州ブロック …… 9
中部ブロック …… 11
四国ブロック …… 11
関東ブロック …… 11
●お知らせ
代表幹事会だより …… 12
事務局より …… 12
編集後記 …… 12

神のデザイン、人のデザイン

佐野　寛
HIROSHI SANO
監査役
東京学芸大学

1．神のデザイン

小野二郎氏は「自然の冠」というエッセイの中で、ウィリアム・モリスが愛したケルムスコット村の別荘ケルムスコット・マナ・ハルスを訪れたとき泊ったバーフォードという町の印象を次のように書いている。（小野二郎著作集Ⅰ『ウィリアム・モリス研究』晶文社・所収）

「翌朝は晴れだった。光の中に姿を見せた町の景観は正直息をのむようだったといって誇張ではない。・・・ゆったりとした道はばの、しかしかなり急な坂になって東に降りて行く道の両側に、形はさまざまながら、みな「あたたかい灰色」につつまれた家々が連なり、やわらかく朝日をそのグレイの肌に吸い込んでいる。坂を降り切ったところに小川が流れ、同じ色の橋がかかり、柳があり、あとは広い、ゆるやかな起伏のある草地に続く。イギリスの田舎町はどこでもいわば終わり方が美しいが、ここのは特にそうだ。家々に切妻壁が多用されているが、一定した形があるわけではない。・・・モダンなガソリン・スタンドも同じ石でつくられ、同じ雰囲気に溶け込んでいる。この灰色は人の肌にもやさしいが、どこかかろやかにすっきりと立っている。何とも気持ちがいい。」

その景観のもとになっているのはコッツウォールド・ライムストーンで、ケルムスコット・マナ・ハウスも同じ石の建築である。そもそも小野氏がバーフォードに泊ったのは、「芸術の本当の意味は、自然に対する人間の尊敬の表現である。つまり自然への冠であり、この大地で人間が生きているということそのものである。日毎に醜い建物でこの地表を汚している現在、この芸術の原義を再確認しなければならない。地表に人間が棲む以上、自然を変形し加工する。その変形、加工が自然への冠にならねばならないのだ。」というモリスが、その「自然への冠」の例に、コッツウォールド・ライムストーンで造られた「あたたかい灰色の家並み」をあげている、その実例がバーフォードであると知ったからだった。

むろんモリスにとって、同じコッツウォールド・ライムストーンで造られたケルムスコット・マナ・ハウスも優れた「自然への冠」の例だった。その縦勾配がついた壁や、コッツウォールド・ライムストーンのスレートが上に向かってサイズダウンし「魚の鱗や鳥の羽と同じ種類の美的快感」をつくりだしている屋根、その重い石屋根を支える急勾配の屋根組が永年の荷重で軽く撓んでいる様など、16世紀に建てられ17世紀に増築されたその古い農家のすべてが、見事な「自然への冠」だった。往時の職人たちは、コッツウォールド・ライムストーンという土地の素材を使い、自然風土に逆らわずに、代々伝えられてきたやり方で、その家を建てた。バーフォードの家並みを造った。それが結果として「自然への冠」になったのである。そして、科学革命も産業革命も知らぬ往時の職人たちを、そのように動かしていたのは、つきつめて言えば、神（＝自然）だった。つまり真のデザイナーは神（＝自然）であり、それらはいわば「神のデザイン」だったのである。

2．人のデザイン

ところで小野氏は、「レッド・ハウス異聞」という文章（同じく『ウィリアム・モリス研究』所収）の末尾で「アーツ・アンド・クラフツ運動はモリスを矮小化した」といっている。普通「デザイン」という場合、前提化した社会内の専門的領域あるいは職能を意味するが、社会主義者であったモリスのデザイン思想は上位概念としての社会そのものに向かっていた。だがアーツ・アンド・クラフツ運動は、モリスの活動を狭義の「デザイン」のレベルで表し、そのレベルで世間に受容させてしまったのだ。後年モリスが、社会主義的啓蒙活動に打ち込んだのはあるいは、自分を専門という檻の中に閉じ込めようとする世間への直接行動だったのではいか。おそらくモリスの思想も感情も「デザインというレベル」だけでなく「自分

というレベル」も超えていたのだ。「自然への冠」として「芸術」を考えることもその現れに他ならない。そしてその評価軸からモリスは、ケルムスコット・マナ・ハウスを高く評価した。一方おそらく、29歳のP．ウェッブが26歳のモリスのために設計したレッド・ハウスに対しては、意外に厳しい評価を下していたのではないか、という気がする。

周知のとおりその後「自然への冠」という考えは、発展する資本主義に疎外され、経済優先社会から駆逐されていった。産業は、科学技術を進化させ、神＝自然の制約を次々に無化して、世界を、消費者たちの望むままに作り替えていった。摩天楼群・・・。ディズニーランド・・・。だが小野二郎が息をのんだような景観を創り出すことはできなくなった。実は神＝自然の制約こそが、そうした完璧な美しさを創り出してきたのだ。神＝自然の制約から逃れた人間はその代償として、あらゆる細部同士が相関し合う複雑微妙な相互関係を、一から十まで全部自分でデザインしなければならなくなった。あらゆる細部に神が宿っていた昔のように、細部にこだわることが即全体を見事なものにするということがなくなった。結果「人のデザイン」は、すべてを制御することの難しさと自然の代わりに絶対性を持った経済的制約に縛られて、いまだに「神のデザイン」のような全包括的な美しさを創り出せずにいる。でいながら一方で、世界を改変する力は途方もなく巨大化している。という現実の中でいま、モリスのいう「自然の冠」という言葉の、意味の重みはいよいよ大きくなっている。特に「都市環境デザイン」にとって「この芸術の原義を再確認」することがいよいよ重要になっているのだ。

都市環境デザインをとりまく状況

中野　恒明
TSUNEAKI NAKANO
代表幹事
アプル総合計画事務所

JUDEの発足から約３年、これを契機として都市環境デザインに関わる各分野の方々との交流、情報交換の場が増えたこと、また相互の交流を通して出身は異なるものの共通の問題意識を有することを確認できたことなど、活動そのものの意義は充分にあったと自負している。その中で都市環境デザインの世界をとりまく周辺環境は大きく様変わって来ていることを感じることが多い。ここでは私の関わる都市デザインや公共土木の分野から周辺環境の変化をいくつか取り上げてみたい。

●表層のデザインから本質のデザインへの時代ーものから空間へ、環境へ

仕事を通して感じることの最大の要素は都市環境デザインの本質に対する理解の浸透と言っても良いであろう。「景観」はバブル期のあだ花かと揶揄する方がいた。聞いてみると表層に高価なものを盛り込むことが景観設計と誤解されたふしがある。しかし振り返ってみれば、景観の試行錯誤期も含め、ブームにあやかり路地や広場、橋などを対象にお化粧デザインが各地で行われてきた。また我々の多くも知らず知らずのうちにバブル予算の消化に寄与してきたことも事実であろう。

しかし経済のバブル期が過ぎ、各地の予算緊縮化の中で、本質を見失ったデザインは淘汰されつつある。また単に「もの」のデザインから空間、環境のデザインへとシフトしつつある。つまりデザインの合理性が求められる時代になりつつあるのは事実であろう。

●デザイン相互の調整、総合化が問われるの時代へ－関係のデザインの重要性

「もの」のデザインから空間のデザインにその重心が移行するに従って、その空間をコーディネートすることの重要性が増してくる。現代社会において都市環境を構成する要素、これらは関係づけられることで成り立っている。例えば、建築や道路、公園、水辺、橋、照明、植栽、各種ストリートファニチュア、サイン等々、一人のデザイナーで創造することは不可能に近い。各専門分野の、しかも複数のデザイナーが当然のことながら関わることとなる。相互をつなぐ橋渡し役、行司役の存在が、そのプロジェクトの成否を左右することもある。そこで何を残すべきか、また新規に創るにあたってのデザインはどうあるべきか、等々が問われてくる。その意味ではデザインのコーディネート、総合化がより不可欠な時代となりつつある。それは自治体側の担当者の役割かも知れないし、民間のデザイナーの誰かであったりする。それによって専門のデザイナーの能力もより引き出せるに違いない。

●造る時代から活かす時代へ

わが国の「もの」思考の発想がＧＮＰに貢献してきたのは事実であろう。「飽きたら捨てる、取り替える」はもはや許容しえない時代となりつつある。その意味ではデザインについても永続性のあるものが求められている。景観づくりとは一過性のものではなく、歴史的時間の観念で捉えられるべき存在に他ならない。永続するもの、そして時間の経過の中で、地域に定着する存在でありたいものである。

とりわけ地球的規模の環境問題が取り沙汰されしかも、大量消費型社会からの脱却を求められている現在、デザイン自体、そして景観を構成する材料についても同様の考え方が不可欠となろう。

つまり、新たに創造するだけでなく、ストックを活かすことも都市環境デザインの重要な視点であり、よりその傾向が強まることもありうるのではないだろうか。

●都市環境デザイナーの自立、さらなる連携の時代へ

景観に関わる計画設計の業務は、バブル経済期に大きく膨らんだのは先に述べたとおりである。担い手たるべきコンサルタントでは対応しきれず、その何割かが匿名の下請に、場合によってはメーカー設計が幅を聞かすケースもあったと聞く。

一方で、その成果に対する社会的評価がなされ、様々な作品批評が公に行われつつある。デザインの匿名性ゆえの責任の不在と言った問題指摘がある。その結果、徐々にではあるがデザインを決定するプロセスも健全な方向に向かいつつあるのは事実であり、設計体制についても人材の指名や複数の専門化の参画による協同作業も増えている。

先の建設疑惑に端を発した公共の発注システムの見直しも、それを助長する結果となると言う声もある。つまり営業行為としてのデザインの慣習や匿名での下請などが見直され、よりオープンな形でデザイナーが参画しうる道が開かれるのではないかとも言われている。

その意味では都市環境デザインの職能に対する社会的評価と責務の明確化とともに、都市環境デザイナーの自立、そして専門化の職能相互の連携がより進むのではないかと期待している。

●地域に根ざした都市環境デザインの時代へ

政治の流れも地方分権へ、と言う声がでている。環境デザイン世界でも多くの優秀な事例が各地に生まれている。都市環境のデザイン自体、地域の風土・歴史・文化に立脚して初めて評価しうるものでもあり、社会的な意義を有すべき存在とも言えよう。そのため今後の流れとして、より地域に根ざした都市環境デザインの展開が進むのではないかと思う。

最後にＪＵＤＩに関しても地域、ブロックの活動がより活発化し、地域社会に対し、より一層の貢献が図れることを期待したいものである。

都市環境デザインとアジア

鳴海　邦碩
KUNIHIRO NARUMI
代表幹事
大阪大学工学部

◇はじめに

都市環境デザイン会議設立準備の時期からこの会議に関わってきたが、今回で代表幹事を交代させてもらうことになった。ようやく各ブロックの活動も盛んになってきたようで、この組織のこれからの展開に期待したいと思う。

今年の春ごろから、〈都市環境デザイン年鑑(仮称)〉の作成に取り組みつつあり、これからしばらくはこちらの方で、会議の活動に関わっていきたいと考えている。年鑑はこの会議の主張を表するものであるので、ぜひ会員諸兄の積極的な参加をいただきたいと期待している。

◇都市環境デザインをめぐる諸課題

さて、これまでの会議の活動のなかで、とくに小生の場合は関西ブロックでの活動だが、都市環境デザインをめぐるさまざまな課題が浮き彫りにされてきている。その課題には、アトランダムだが、例えば次のようなものがある。

①都市環境デザインにおけるアジア的なものとヨーロッパ的なもの

②計画・設計体制におけるデザインの評価の枠組み（特に公共開発や公共事業におけるデザインの位置付け）

③大都市域のコンサルタントが地方の環境デザインにどのように関わるべきか、等々。

これらの課題については、これからも会議の活動のなかで検討されていくことが期待されるが、今回はこの誌面を借りて第１の課題について若干述べておきたい。

◇アジアを知ることの必要性

長い間、ヨーロッパやアメリカはわたしたちが目指しているものの目標であったが、近年、それは次第に相対化されつつあり、〈アジア〉だとか〈地域性〉、〈風土性の環境〉とかがいわれだしている。ところが〈アジア〉〈地域性〉〈風土性の環境〉といった課題に関する情報が極めて貧困なのである。

これまで、『日本の都市空間』、『日本デザイン論』をはじめとし、さまざまな〈町並み研究〉や〈日本都市論〉が積み重ねられてきている。しかし、それが教育のなかに確りと位置付けられているとはいえないように思う。特に、アジアの都市や建築に関する情報が欠落しており、それが専門家教育のなかに登場することは極めてまれである。

取り組まれるべき課題は多いか、こうしたジャンルにおける作業の積み重ねも積極的に進めていかなければならない。わたくしとしても微力ながらそうした作業を続けてきている。この場を借りて恐縮だが、最近わたくしどもが作成した書物を紹介しておきたい。会員諸兄のご批判を賜れば幸いである。

神々と生きる村　王宮の都市
バリとジャワの集住の構造
鳴海邦碩・A.P.パリミン・田原直樹　共編著
学芸出版社

山手地区　5つのオープンスペース

菅　孝能
TAKAYOSHI SUGE
代表幹事
山手総合研究所

山手地区は、横浜市の都心の南に位置する高台にあり、横浜開港時の外人居留地にはじまる住宅地である。横浜の歴史的地区であり、洋館、教会、公園、外人墓地、ミッションスクールなどが日本離れした豊かな住環境を形成している。台地からの港や都心部を眺める眺望とあいまって、横浜でも魅力あふれる地区となっている。

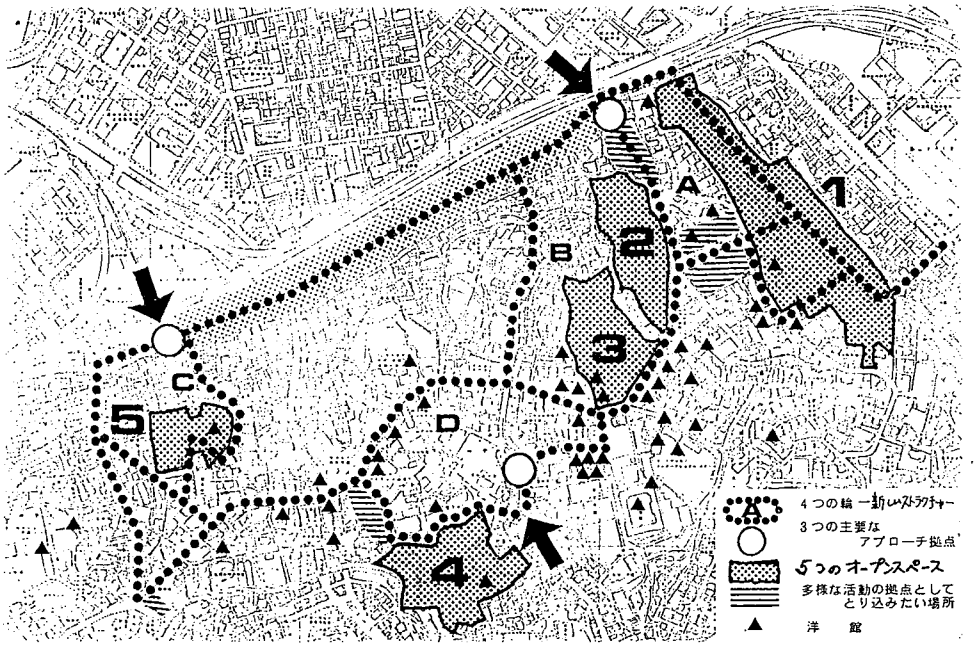
横浜市は、近代横浜発祥の地の一つである。こと山手地区の歴史的な景観と縦貫橋を保全しつつ、広く市民に親しまれる文化ゾーンとして整備するため、「山手プロムナード・ミュージアム構想」に基づく公共空間の整備を推進している。

ここに紹介する五つの公園・オープンスペースはその一環として、順次改修整備が行われているものの中間報告である。

計画はそうした景観を保全するとともに、都市景観の総合的な見直しを図り、断片的な開発や保全ではなく、五つのオープンスペースを一つのエリアとして有機的に結ぶことにより、市民の文化活動の場として積極的に育てていく方針によっている。

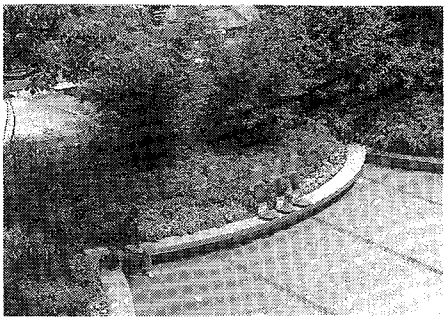
既存のストラクチャーに新しいストラクチャーを重ね合わせた多面的な活動の場として機能するであろう。したがって、各地に設置したストリート・ファニチュアも山手地区をトータルな視点で捉えたデザイン発想で貫かれている。

■新しい山手のストラクチャーと五つのオープンスペース



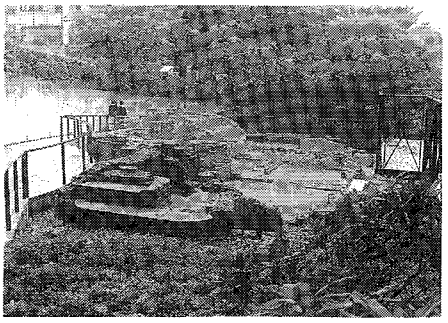
1．港の見える丘公園

公園敷地の拡張に伴い、霧笛橋広場、南の森（県立近代美術館周辺）の整備が行われた。霧笛橋広場は大仏記念館と近代文学館の間の谷間にあり、二つの施設を結ぶ橋や建物の様式性の強い形状に対して、水面に見立てた大判タイル舗装と円弧を描くベンチや植栽で、静かな空間を創り出している。現在、港を望む展望台の改築と、それに合わせた造園整備が進められている。(1993～1995年)



2．元町公園・ブラフ80テラスとエリスマン邸

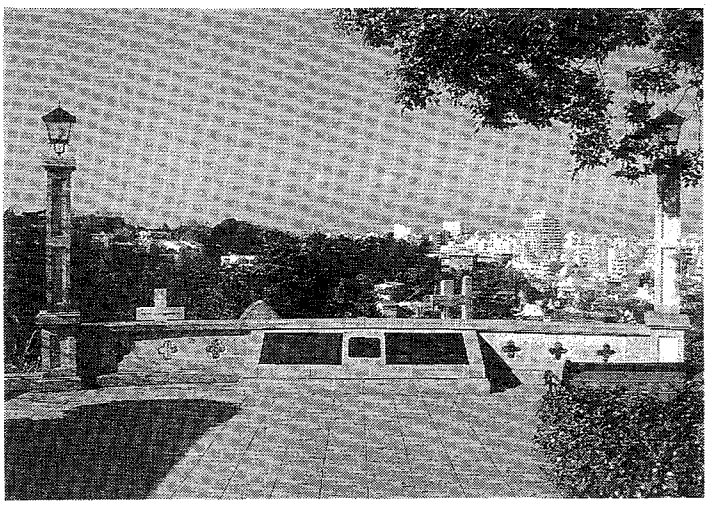
ブラフ80テラスは、関東大震災で倒壊した洋館遺構が出土したものを展示する野外博物館として整備された。上下二つのデッキとそれを結ぶ円弧を描く通路で遺構を囲み、斜面越しに横浜都心部を望むことができる。土留擁壁を兼ねた通路の側壁には、出土したマジョリカ・タイルやジェラール瓦がはめこまれている。エリスマン邸はA. レーモンド設計の洋館を移築復元したもので、山手洋館の資料および集会展示施設として活用されている。（1984～1989年）



3．山手外人墓地

横浜山手外人墓地は、日本の近代化に貢献した外国人をはじめ、横浜にゆかりの深い人々が眠る墓地であるが管理向上のため、神奈川県と横浜市の助成により一部墓域の公開をふくめ、園内の整備を行った。（1984年）

著名人についてはその略歴や功績を称えたサインを設置した。園内を展望できる入口広場も整備し、入園者への案内と園の維持管理に寄付を募るサインなどを設置した。



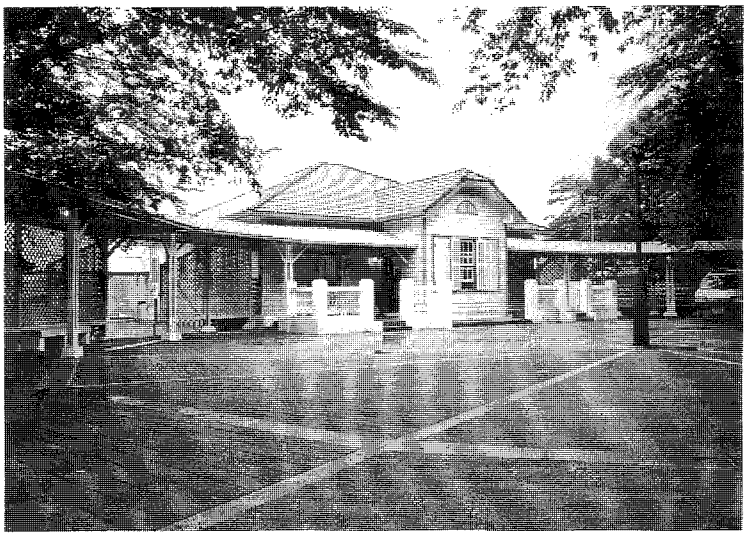
4．山手イタリア山庭園

昔イタリア領事館があった眺めの良い空地が四段になる地形を利用したイタリア式建築庭園として設計された。このオープンスペースには山手地区内の洋館を移築して市民利用の文化ゾーンとして整備が行われる。1993年には震災直後に外国人住宅として建てられた洋館を移築し、新たに付設した集会・展示施設とともにブラフ80番館、横浜山手－暮らしと歴史の博物館の資料館として公開されている。（1990～1993年）

5．山手公園

山手公園の拡張整備に伴って、山手地区内で取り壊された洋館を移築利用して公園管理事務所およびテニスクラブハウスが整備された。明治期の洋館をイメージした管理事務所には広場を囲むように湾曲した木製の回廊が囲んでおり、建物の正面軸線上に四阿が建てられている。

（1986～1987年）



「新と旧の融合」久澄橋のデザイン

林　英光
HIDEAKI HAYASHI
代表幹事
愛知県立芸術大学

久澄橋の概要

愛知県豊田市を流れる矢作川に架設された橋長274m、４車線の道路橋である。その特徴は今までのアーチから吊り材が垂直であったものを、アーチに直交する形に挑戦したことである。支長間が91mと96mの２本の単弦ローゼ桁と鋼製の箱桁からなり、1989年に工事を始め93年12月に40億円かけて開通した。

トヨタ自動車の本拠地である豊田市の、朝晩の交通ラッシュを緩和するために作られ、近年中に撤去を待つ旧橋と並んで使われている。

この橋のかかる矢作川は愛知県の中央を、中央アルプス南端の恵那山に源を発し、矢作ダム、豊田市、岡崎市を経て三河湾へ注いでいる117Kmの河川である。古来より流域の人々に親しまれ、水運や潅漑、紡績、漁業など流域住民と川のつながりは強く、現在でも大切にされ、美しい景観を保っている穏やかな流れを持つ川である。

特に久澄橋までの上流区間は、市民の憩いの場として広大な河川敷が各種のグランドや広場として使われており、橋は、遠景、或は日常下からの見上げる対象としての意味を持っていた。

景観デザイン

1987年、県土木部による久澄橋景観デザイン委員会が設けられ、アドバイザーとしてデザインコンセプトと報告書をまとめあげた。この時から県土木部、橋梁コンサルタント、私のアトリエの間で何度も議論をしたが、橋梁の形式は単弦ローゼと決定されており、橋脚の位置は使用中の旧橋との関係で、形状も概略決まっていた。

私の役割は、今迄のいかにもゴツイ単弦ローゼ橋の形状を、スリムなものにすることと、色彩、高欄、照明、舗装のデザインを期待された。しかし私には表面を撫でまわすだけをデザインと思われていることへの反発があり、単弦ローゼの変更を訴え、その結果両手のひらの指をひろげたその先に、アーチをとりつけた形の変形単弦ローゼの提案に辿りついた。だがその前例が無い、力学的なシミュレーションと時間が間に合わないという理由で、このアイディアが立ち消えそうになったが、担当者達の努力でなんとかO・K、ゴーサインが出た時は嬉しかった。

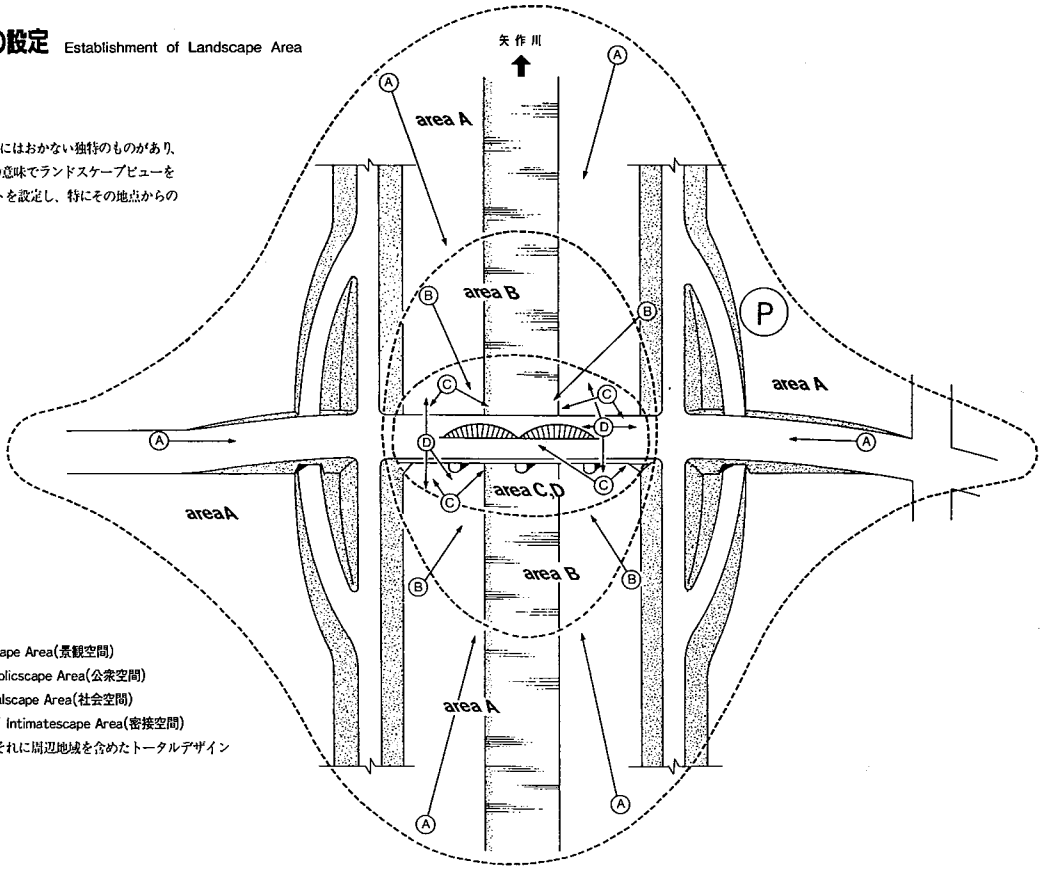
同時に私が県土木の担当者から求められた課題は、良いデザインとは何か、その基準であった。そんなものはありそうで無い。あるとすれば、「個は全体のためにある」、という環境デザイナーとしての私の信条があるのみで、あらゆる周辺条件の異なる土木、景観デザインに、文章で書いたマニュアルはありえない。「地上にこの場所は１ヶ所しかない」のである。

そこで私の敬愛するエドワードホール氏の、距離と領域の関係で対象を考える方法をこのプロジェクトに導入し、何となく皆の納得を得た。形態や色彩を論議、決定するにあたり、1Kmの遠距離からのその役割を、そして人々の歩行空間からの接触距離でのものの形、色、テクスチャーのあり方を考え、トータルデザインを進める手がかりとした。

実際に橋のデザインとは関係なかったのだが、架設に当り、切り倒すかどうするか大変気になったのが、河川敷にデンと居座った１本の榎の大木であった。これを残し風景のポイントにすえるため、旧橋をまたいで移植する絵を描いたが、下流側に動かすだけに終ったが、やがてまた枝葉を伸

ランドスケープエリアの設定 Establishment of Landscape Area

橋の眺めは、人々の目をひきつけずにはおかない独特のものがあり、橋は風景の中心的存在になる。その意味でランドスケープビューを意識したいくつかのビューポイントを設定し、特にその地点からの修景に力を入れる必要がある。



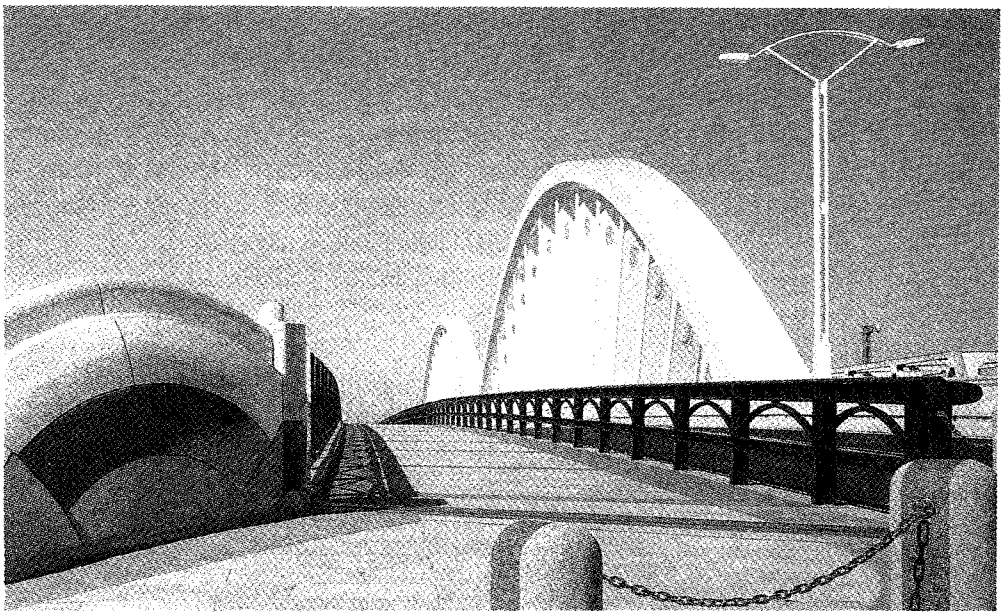
景観の視点場を距離感に応じて
A. ランドスケープエリア Landscape Area(景観空間)
B. パブリックスケープエリア Publicscape Area(公衆空間)
C. ソシアルスケープエリア Socialscape Area(社会空間)
D. インティメイトスケープエリア Intimatescape Area(密接空間)
の４つに分け、橋と道路と河川、それに周辺地域を含めたトータルデザインとしてのエリアを設定した。

ばし風景に魅力を与えてくれるだろう。

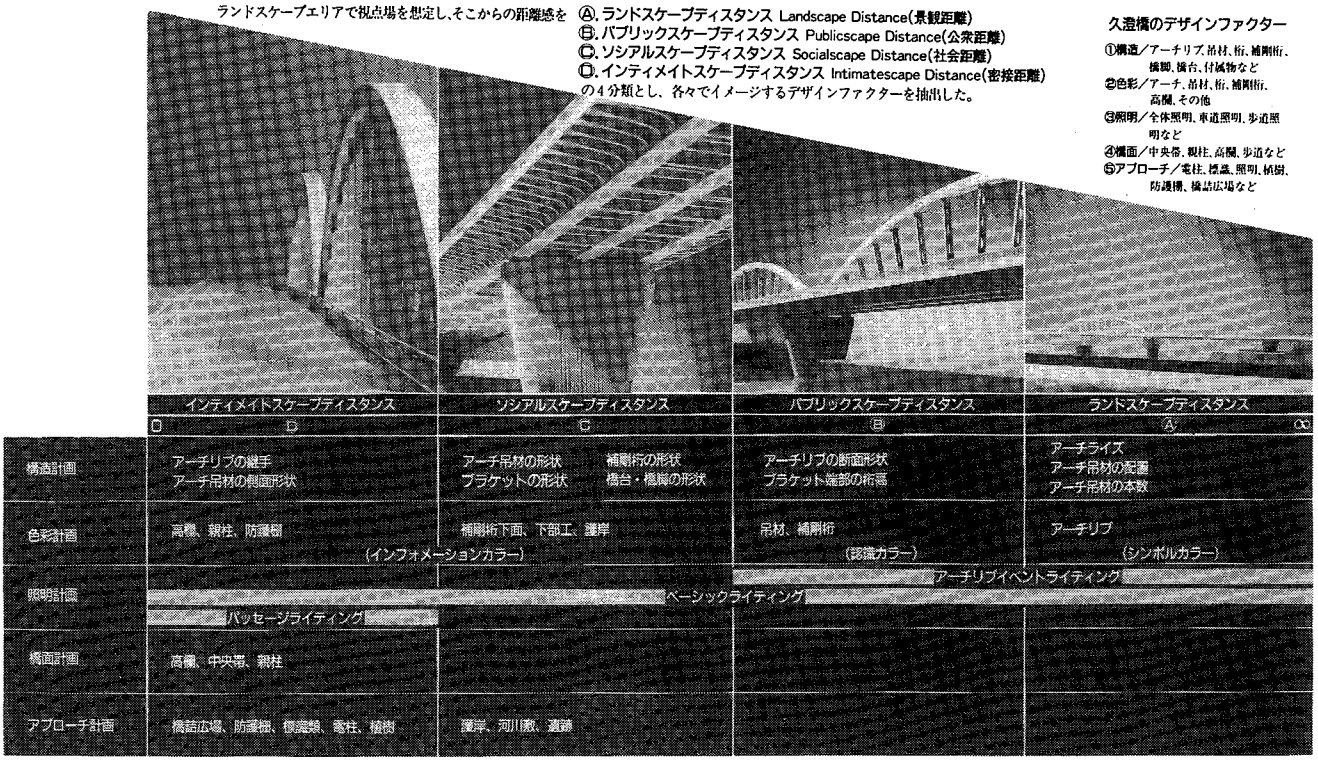
「形態、色彩のデザイン」

穏やかな、どこか旧舎娘のような品のあるこの矢作川に、喉に小骨のひっかかったような橋は似合わない。そこで優しいゆるやかな円弧を造形のトータルデザインとしてのモチーフとして設定した。そして矢作川の穏やかな流れや風情をひき立てるため、アーチリブの断面形状も面取りした逆台形状にし、吊り材もその形状を合わせたような偏平の8角形とした。高欄や親柱、舗装面、河川敷から見上げるブラケットにも円弧状の曲線を多用したため、抵抗の少ない、優しい風情の橋となった。ただ、四隅の親柱に古来の方位の守りとして、東の青龍、青、青春、春。南の朱雀、赤、情熱、夏。西の白虎、白、白秋。北の玄武、黒、冬をテーマに石材を選び、円弧の造形で抽象的に表現すると同時に詩文を書き入れて見た。このことで幾分ボリューム感とダイナミックさ、さらに新しい技術と古来の伝統が融合し、過去、現在、未来へのストーリーが出来上がったと自負している。これからの土木は、新と旧、過去から未来へつなげる思想が日本の都市環境の風景に必要に想う。

色彩は、これも自論である自然の素材の色、地域の色、日本の街の伝統色である白、黒を用いた。余談だが、この久澄橋の400m上流に、黒川紀章氏設計の豊田大橋が、何倍かの予算で工事中である。完成時には性格の異なる二橋の比較をどのようにされるか。そして、その橋上から見たこちらの橋の質素な昼の景、あっさりとしたライトアップの夜の姿を見てもらえるのが楽しみである。



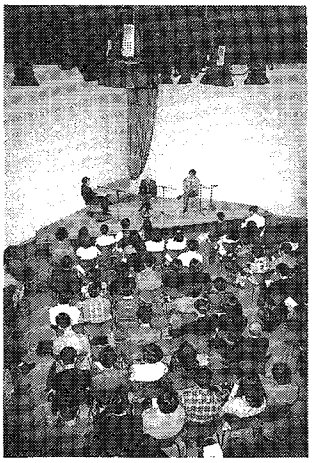
ランドスケープのファクターと距離感 Factors and Perspective of Landscape



研修研究委員会報告・第２回都市環境デザインセミナー

浦口　醇二
JUNNJI URAGUCHI
研修・研究委員
かいアソシエイツ

「槇文彦先生と都市環境
デザインを語ろう」
・開催日　1994年４月15日（金）
・会　場　ヒルサイドプラザ
（代官山ヒルサイドテラス内）
・講　師　槇　文彦
対談者　土田　旭
司　会　篠原　修
・担　当　研修・研究委員会



第２回都市環境デザインセミナーは、建築家の槇文彦先生をお招きし、先生の代表作のひとつである代官山ヒルサイドテラスで開催した。天候に恵まれ、参加者も150名を超え、満員でいながら落ち着いた、雰囲気の良いセミナーとなった。

〔槇先生の講演：最初に基本的な捉え方として〕

近代から現代にかけて都市計画の分野が確立されてくると、アーバンデザインは建築と都市計画の中間の形態的な問題を含みつつ、計画的な原則や思想も触れる領域として捉えられてきた。

建築家にとって都市は大き過ぎ、建築と都市は少し離れすぎている感じがする。アーバンデザインの考え方の中で建築を考えたり、建築をアーバンデザインの中で考える方が話しやすい。

〔スライドを見ながら、1960年前後のことなど〕

ハーバードのマスターの最後の課題が「都市の再開発」で、建築、都市計画、造園の学生が共同作業を行い、他ジャンルの人と仕事をする楽しさを学んだ。

その後、ハーバードに戻り、アーバンデザインプログラムでセルトを手伝い、また、世界の集落等を見て回り、「群」の面白さに惹かれた。集合の原理原則、いわば、群造形の美学。帰国後は、メタボリズムの宣言をしたり、新宿副都心の提案などをした時代だった。

多くの人に出会う機会を得た。ハーバードではグロピウスやチームテンの連中など。チームテンは、ＣＩＡＭの教条的な都市デザインに対して、土地の文化のコンテキストを考えなければいけないと。色々な形で、考え方の滋養を摂れた時代だったと思う。

その後、ボストンで交通ネットワークを使って都市の改善計画を考えた時、点のディベロップメントから始まり、場合によってはそれがリニアに伸びて、さらにある広がりを持つものになるような考え方をした。システムとは、必ずしもヒエラルキーをつくるものではないという考え方でやったりしていた。

〔白い箱のモダニズム。土浦亀城邸のこと。そしてヒルサイドテラス〕

子供の頃に体験した、土浦亀城邸の白い箱のモダニズム。その空間が非常に新鮮な衝撃だった。モダニズムの透明性。記憶に強く残っている。

ヒルサイドテラスは始める時点から、ぼつぼつ開発していきたいと、施主の浅倉さんと共に考えていた。一団地で始めたため、当初、地域全体の計画をした。しかし、第２期に入るとマスタープランどおりに進めると良いものが出来ないと気付いた。丁度、連歌のように、歌を受け、また歌を詠む。ヒルサイドテラスではアーバンデザインのコンテキストのことを学んだと思う。

第１期から第６期まで25年。使う材料や形態は変化しているが、どこかでつながっている。ひとつの姿をもってきている。

建築はモダニズムだが、サイトプランは場所に従ったやり方。こういう経験的な手法だと思う。

〔パブリック性。アーバニティについて。〕

都市の賑わいとは、昔のように町全体で祭りをする群衆ではなくて、少数のためにある。独りとか２人がどう楽しめるかが大切だ。

ニューヨークのＩＢＭの吹き抜け空間は素晴らしい。点々と竹とベンチがあり、人がぼんやりと過ごせる場所になっている。周りは摩天楼。ガラスを介してみえる。これが都市になくてはならない空間だと思う。

ジョルジュ・スーラーの海岸の絵に見られるように、19世紀のパリの都市生活では、皆が違うことを考え、違うことをしようとしていた。これは我々の都市でもリアルな話だ。

スパイラルの３階に行く所に、アルドロッシの椅子を置いてみた。何時も誰かが座り、本を読んだり、外の通りを見下ろしたりしている。こういう空間が、我々が都市に提供できるものだ。

〔そして、幾つかの海外での仕事を紹介して下さり、最後に、現代都市の２つの考え方、コンテクスチュアリズムとクールハースなどのネオリアリズムに触れて、講演を終わった。〕

〔講演後：対談の中で、土田さんが槇先生のコンテクスチュアリズムへの見解を問いかけると〕

ローカルな材料を使うといったことよりも、自分の考えている時代の写し鏡としての建築に興味がある。人間の共通の空間認識や空間像を建築に反映したい。スケール、テクスチャーや触感性などを忘れないでやっていけば、ユーザーを裏切ることはないと思う。

〔そして、篠原さんの質問に対して〕

都市は故郷であって、異郷である。ローカリズムでは、都市に自分の故郷あるいはアイデンティティを求め、建築を記憶の装置として考える。

一方で同時に、建築家は大都市にエキサイトメント、異郷性への可能性を求める。建築家はこの両者の間で揺れ動いているところがある。

カテドラルのように、ミサで大勢と共にいても、また独りでいても、いずれも凄い、そういう空間のあり方が、建築や都市の一つの本質を表していると思う。

（スライドを使いながらの２時間、短く感じました。ありがとうございました。）

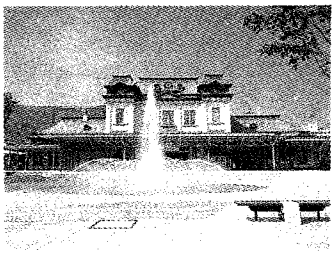
ブロック・ニュース

海峡都市の文化会議 開催される

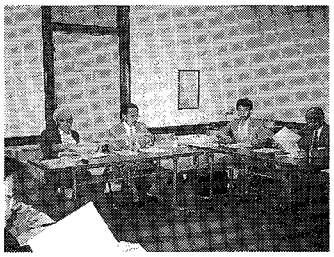
■九州ブロック

岡　道也
MICHIYA OKA
ブロック幹事
九州芸術工科大学

〈報告者〉
大久保　裕文
HIROFUMI OHKUBO
大久保計画アトリエ

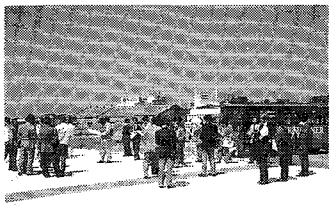


JR門司港駅



九州ブロック年次総会の会議

懇親パーティの開会風景



下関の港湾地区の視察

九州ブロックでは、昨年に続き今年も、対外的な事業活動を北九州市の門司港地区において行った。「海峡都市の文化を語る」と題した研究懇談会の概要について、以下に報告したい。

■年に1度は各都市持ち回りで

昨年（1993年5月）は、九州ブロックの初めての事業活動として、博多湾洋上会議の開催を行い関係者の好評を得たことから、年に1度、九州の各都市持ち回りで都市環境デザインに係わりのあるテーマで事業活動を行うこととなった。現在の会員勢力は24名中13名が福岡市、3名が北九州市、佐賀県、熊本県、鹿児島県、大分県それぞれ2名程度であり、当会の今後の活動や役割等を考えた場合、定期的な催しを行い事業活動を継続し、会員増強を図っていくことが九州ブロックでの基本認識となっている。この様なことから、第2回目の事業活動を北九州市の門司港地区で5月21日(土)、22日(日)の2日間にわたって開催することとなった。

■研究懇談会のフレーム

「海峡都市の文化を語る」会議の目的は大きくは3つに集約される。第1は、対話と交歓の場を創る懇親パーティーの開催で、JUDI会員相互の交流や都市環境デザインに係わりのある方々との交流を目的としたものであり、1日目の夕刻から、駅舎としては唯一の国の重要文化財指定を受けたJR門司港駅2階ホールで開催した。2日目は目的の第2として、港町を観る都市視察で海峡都市の門司港地区と山口県の下関地区を歴史、都市整備等の都市環境デザインの視点から視察を行った。

そして第3の目的として、街の現地視察の後、港をテーマに都市と都市デザインを語るシンポジウムを現地のまちづくり団体と自治体にそれに本会のメンバー3者によりパネルディスカッションを行い、具体的な話題の提供を行ったことである。

概ね、この3つを2日間の会議の目的として研究懇談会が開催された。

■九州ブロック年次総会

上記の研究懇談会開催の3つの目的の遂行の前に、第1日目の午後4時半から1時間、九州ブロックの年次総会がブロック会員15名の出席の下、門司港駅2階別室で開催された。この総会では、本部の代表幹事の南條氏の参加をもお願いし、今年度の活動報告と決算報告、次年度の活動計画と予算計画が提示された。次年度の各都市持ち回り事業は佐賀市で行うこととなった他、この事業を通して会員の拡大を行うこと等が決められた。

■懇親パーティー

九州ブロック年次総会の後、午後6時から懇親パーティーが催され、都市環境や建築のデザイン関係の方々、地元のまちづくりの会の方々、自治体の関係者等70名を超える参加があった。今年の事業の昨年との違いは、門司港と下関という2つの都市に題材を得て、それらの都市デザインや文化を具体的に観て、語る、モデルスタディを行ったことであり、そのために地元のまちづくりの会や自治体に広く参加をお願いしたことである。この様なことから、懇親パーティーは我々会員や専門化の参加はもとより、地元市民や行政の方々の多くの参加が得られ、大正3年に建築された駅舎のホールでレトロ風の和やかで楽しい交流の一時を持つことができた。

■都市視察

翌23日の午前中は、JRバス1台で54人の参加者による下関地区と門司港地区、両都市港湾部の都市視察を行った。始めにＪＲ門司港駅近くの西海岸から渡船で約6分、本州の下関へ渡り、JRの貸し切りバスに乗り継ぎ海岸部の整備状況や歴史的な建物を下関市の職員の方の説明を受けながら回った。下関地区から門司港地区へは昭和48年に開通した関門橋を渡り、九州最北端の和布刈（めかり）神社や昭和63年度に創設された「門司港レトロめぐり海峡めぐり推進事業」の整備状況等を視察した。特に門司港地区においては、海洋時代、鉄道時代、自動車時代を生き抜いてきた都市であるだけに様々な表情を持った魅力に触れることができた。

■シンポジウム

23日の午後からは、「海峡都市の文化を語る」と題したシンポジウムが開催された。会場は、JR門司港駅舎の2階ホールで100名限定の席が満席なった。シンポジウムの前に、門司港のレトロ事業や門司港地区と下関地区の状況把握のために簡単にスライドを見た後、討議に移った。パネラーは、自治体から、北九州市企画局門司港レトロ事業推進室　木戸一雄氏、下関市秘書室広報公聴課　安冨静夫氏、地元のまちづくりから、もじまちづくり21世紀の会　高橋泰雄氏、㈶下関21世紀協会　片野静次氏、本会から、代表幹事の南條道昌氏、同じく中野恒明氏、そしてコーディネーターとして九州ブロック幹事の岡道也の7人で討議を行った。自治体、まちづくり、専門家それぞれに関門海峡の2都市あるいは、海外の海峡都市にこだわった都市づくりへの多面的な発言があった。討議は前半に海峡都市の現状や問題を提示し、10分の休憩を挟んで後半は都市づくりへの具体的な提言を行うものであった。約2時間半にわたった討議を要約すると次の様なものである。

（木戸氏　北九州市）

・昭和63年から始まったレトロ事業は平成6年12月で終わるが、これからはソフト面での展開が課題である。今後、門司港地区の歴史ある建物を核とした都市型観光を推進することとなっている。

（安冨氏　下関市）

・海峡のすばらしい風景をいかにして守っていく

かがこの地区の課題であり、この視点から港湾の公共施設は港に係わりのあるデザインを行う計画である。

（高橋氏　もじまちづくり21世紀の会）

・昭和60年に会が発足して10年がたって思うに、まちづくりは人づくりであり、ボランティアとしての活動と事業としての活動とではまちづくりの方法は違ってくる。この門司港においては生産的事業活動を考えたまちづくりが必要である。

（片野氏　㈶下関21世紀協会）

・基金１億円を目標として企業100社、個人200人でまちづくりの組織を構成し、行動するシンクタンクとなっている。北九州市、下関市合わせて150万人の経済圏域が考えられ、関門海峡はこの圏域の歴史の運河と位置付けしている。

（南條氏　本会代表幹事）

・海峡都市の特徴は、先端部が対峙し、流通面で要衝となっていることであり、対峙していることに魅力がある。海外の例からも、２つの都市の間で相違感を創ることが必要である。

（中野氏　本会代表幹事）

・海峡都市の良さをどれほど出せるかが重要であり、そのためにも海上交通のあり方を考える必要がある。海峡都市は両者の都市機能分担を図りながら共存共栄が求められ、門司港や下関は、街なみの保存と経済活動との調和が大切である。

ここで10分の休憩の後、都市環境の質の問題と都市づくりへの参加の問題に焦点を当て提言を行ってもらうこととした。

（木戸氏　北九州市）

・古いものの中に新しいものを受入れ創り出すエネルギーが必要であり、そのためにも門司港地区に面的な整備地域の指定を行っていきたい。

（安冨氏　下関市）

・海峡の景観を活かしたまちづくりが必要である。たとえば、唐戸魚市場の活性化を通じて魚にこだわったまちづくりを進めて行きたいと考えている。

（高橋氏　もじまちづくり21世紀の会）

・門司港地区は“歴史と出会うまち”がまちづくりの整備コンセプトであり、門司港のまちの骨格を壊さず、動態的な保存を進めていきたい。

（片野氏　㈶下関21世紀協会）

・残すものと創るものについて、コンセプトや合意形成が必要である。下関のまちは門司港はもとより、海に向かった国と直接的な国際化を図っていきたい。

（南條氏　本会代表幹事）

・都市整備の面から、我が国はこれまで“広場の文化”はほとんどなく、“通りの文化”であった。今後、公共空間の整備においては、空間の周りに施設をどう張り付けるか、といった仕組みを考えて行くことが必要である。

・市民参加の面から、門司港地区の将来を皆で考えるために、まちの模型を市民に見せ、広く意見を聞くことも必要である。また、来街者にとって、どんな文化があり、何が買えるかを提供するソフト産業も必要である。例えば、コペンハーゲンの空港のミュージアム、ポーランドのダブリスク（港町）のフリーポートやクラック（広場）のイベントの演出などがある。

（中野氏　本会代表幹事）

・マスタープランを市民に提示することは、必ずしもメリットばかりではなく、土地の買い占め等で計画が実現しなかったケースもある。門司港地区においては、将来的には地価の状況や環境から良好な低層住宅地がふさわしい。

（岡　九州ブロック幹事）

・６人のパネラーの様々な問題や提言を受けてシンポジウムのとりまとめとして整理すると次の様なものとなろう。

・海峡を挟んだ門司港地区と下関地区とをリンクすることを再度考え、両市によるパートナーシップが必要である。また、海峡を挟んで、見る関係と見られる関係によっていい景観形成に係わっていくことが大切である。そして、お互いが仲よくするだけでなく、一種の緊張感が両市に対して新しい文化活動となっていくことに期待したい。

以上の様なしめくくりを行ったが、会場の門司港駅舎の２階は海峡都市の文化を語る会議にふさわしく文化的な施設の中で真剣に聞き入る姿が印象的であった。

■今回の研究懇談会を終えて

基本的には昨年と同様な形式で２日間にわたった研究懇談会を終えることができたが、昨年と今年の事業活動を踏まえて今後のブロック活動について感想を述べておきたい。

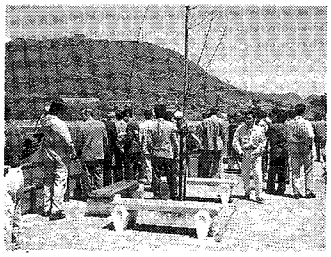
第１に、各都市持ち回りの事業活動を今後も継続していく必要性を強く持った。次年度は、佐賀市での開催がほぼ確定しているが、持ち回り事業が会員の増強や組織化のための基礎固めであり条件でもあると考えられる。

第２に、九州ブロック会員の過半が福岡市に偏在していることに対して何らかの手立てを講じる必要がある。たとえば、各県単位でまとまりを作り連携を取っていくようなことである。

第３に、今回反省させられた点であるが、本部以外の他ブロックからの参加がなかったことである。内部の調整に手間取ったため、開催案内の連絡が間際になってしまったことによろう。今後の課題である。

第４に、活動資金の問題である。事業活動を支える基本的な経費は、会員の個人負担となっていることが多く、このため九州各地からの参加は年に１度のブロック総会時だけとなっている。これも、今後の重要な課題であると考えている。

（大久保裕文）



門司港地区の公園、
対岸は下関地区

シンポジウムに先立って
行われたスライド会

シンポジウム

シンポジウム

■中部ブロック

森　延彦
NOBUHIKO MORI
静岡県都市住宅部

4月23日静岡市において中部の例会を開催した。16名が参加し、現地視察と会議を開催した。

■現地視察

・静岡県立美術館ロダン館及びプロムナード

本年4月にオープンしたばかりの県立美術館ロダン館を見学。地獄の門やカレーの市民をはじめロダンの作品が多数展示されている。

美術館にアプローチする歩行者専用道はなだらかな傾斜の道に沿って桜、ケヤキ等の豊かな植栽、野外彫刻などが配置されたプロムナードである。静岡県の都市景観賞受賞地区である。

・静清土地区画整理事業地区の一部

静岡県施行の事業により昨年度竣工した地区のうち、記念公園と大木のケヤキ並木の美術館通り線を見学。地区全体は一昨年度の景観大賞受賞地区である。

■会議

・事業及び会計報告
・ブロック幹事会の報告
・ブロック幹事の改選
・今後の活動について

■懇親会

■四国ブロック

■四国ブロック（会員7名）では、都市環境デザインに関し問題提起や提案を各方面に行っていくと同時に、会員の意志疎通を図り、会の充実を図るためブロック機関紙を発刊することとし、この度（5月25日）創刊号を発刊した。講読・交流を希望する方は〒770徳島市南二軒町2－3－3－301林建築事務所、林茂樹（ブロック幹事）または〒780高知市本町5－1－45高知市役所、山上庄一（発行責任者）まで。（ブロック会友として年間2千円を連絡費等に充てたいと思います）

■関東ブロック

■関東ブロックでは、ブロック内の会員相互の情報連絡・意見交換の目的で、関東ブロック広報紙「ブロックレター」を94年2月に試作号、4月に第1号を発行しました。隔月発行を予定しています。ブロック会員外でご希望の方に送料＋αの実費でお届けすることを検討しています。ご希望の方はFax03-3861-4209都市環境計画研究所、伊藤洋（ブロック幹事）まで。　〔伊藤　洋〕

■加藤源氏が日本都市計画学会計画設計賞を受賞

本会会員の加藤氏が平成5年度日本都市計画学会設計賞を受賞した。賞は「花巻駅周辺地区における地方都市再生の試み」と題して、花巻市の吉田功市長とともに授与されたものである。都市計画、都市設計賞は受賞者の特定が曖昧になることが多く、その意味で今回の受賞は画期的と言える。今後ともこの点について様々な角度から議論、研究することが必要である。　〔土田　旭〕

■関東ブロックで見学会を開催
－日立駅前地区の都市デザイン事例

来る9月17日（土）、表題の見学会と意見交換会を行います。都市デザインコーディネートを行った宮本寿雄氏（日立市）と土田旭氏（都市環境研究所）による現地説明、意見交換、交流懇親会等を行います。当日14:00現地集合予定。参加希望者は担当幹事（予定）の中野恒明（Fax:03-3816-4249）まで。隣接のブロックの方も歓迎します。希望者に詳細スケジュールをお知らせします。

〔中野恒明〕

代表幹事会だより

加藤　源
GEN KATO
日本都市総合研究所

第4期定例総会も近づき、代表幹事会では総会の準備を進めておりますが、こういった中で、最近（第36、37回）の代表幹事会における主要な相談事項をお伝え致します。

1．財政基盤の充実

本会会員も400人を超え、各委員会、ブロック等の活動も活発化し、またいくつかの活動については定例化してきております。極めて喜ばしいことは言うまでもありませんが、これらの結果、財政基盤の充実が急務であることが来期の予算計画を検討する中で明確になってきております。対応策として、協力会費の増額依頼、事業活動の活発化等が検討されていますが、会員諸兄の名案、ご協力を期待しております。

2．自治体職員を対象とした都市環境デザイン研修会の開催

わが国の都市環境を魅力的なものにしていく上で、自治体職員の理解、実践は極めて重要です。このような認識から、また本会の社会的活動の一環として、来期においては、自治体職員を対象に都市環境デザインの研修会を開催することについて、研修・研究委員会を中心に検討が進められております。講師は本会会員が当たりますが、単なるセミナー、シンポジウムのような一方通行のものではなく、演習を多く取り込んだ実戦的なものとしたいと考えております。乞うご期待。

事務局より

1　新会員の紹介

1994年4月1日～5月31日の入会者は下記の通りです。（入会順、敬称略）

5/31 現在の会員数は 412名です。

氏　名	勤　務　先
壱岐　伸敏	㈱宣研
海老　陽三	㈱白邦コンサルタント
吉田　洋	㈱白邦コンサルタント
徳本　修一	㈱総合園芸
稲葉　実	㈱三四五建築研究所
柳田　優	㈱ビーエーシー・アーバンプロジェクト
北原　良彦	㈱計画情報研究所
清水　忠男	千葉大学工学部工業意匠学科
埒　正浩	㈱日本海コンサルタント
吉田　八郎	秩父セメント㈱中央研究所
長阪　純男	中部産業㈱
篠田　伸生	地域振興整備公団都市整備事業部〒100 千代田区霞が関3-8-1 TEL03-3508-1773　FAX3501-2328
柴田　好敏	㈱アール・イー・シー 環境計画研究所 〒152 目黒区鷹番2-21-11-301 TEL03-5712-9399　FAX5721-8286
田中　滋夫	㈱都市デザイン 〒102 千代田区九段南3-3-4
福永　秀歳	自宅　国分寺市日吉町4-15-15
宮地　宏	パシフィックコンサルタンツ㈱　中部支社 〒451 名古屋市西区牛島町2-5 トミタビル3F　TEL052-589-3104　FAX561-6883
森　延彦	静岡県都市住宅部都市計画課 TEL054-221-3064
山本　忠夫	㈱ビーウエイズ 〒162 新宿区市ヶ谷田町1-19 SPC市ヶ谷3F TEL03-3260-9731　FAX3260-9732

2　住所変更等（敬称略）

氏　名	変　更　内　容（新）
浅野　聡	三重大学工学部建築学科 〒514 三重県津市上浜町1515 TEL0592-31-9441　FAX31-9452
鵜飼　増由	愛知県道路公社工務部 〒460 名古屋市中区丸の内3-19-30　TEL052-961-1624

3　総会の出欠について

7月9日(土)に都市環境デザイン会議第4期総会・モニターメッセが開催されますが、出欠の連絡をされていない方は至急事務局までご連絡下さい。また、総会欠席の方は委任状をお送り下さい。

編集後記

代表幹事や監査役、各委員会そして各ブロック幹事の方々などの努力で活動が活発になってきた。すでに役員の改選期をむかえ、その活動をより積極的に拡充していくことが期待される。そこで、今回は代表幹事と監査役を交替される方々に執筆願った。今後の活動に活かしたいものである。

（森　延彦）

JUDI
NEWS
018
June 1994